

萩ジオパーク構想が めざすもの

火山に育まれた萩の大地で地球3億年の
歴史を学び・今に生かし・未来へ伝える

ジオパークとは
地域の自然に親しみ、
その成り立ちを学び、
楽しむ場所です。

日本ジオパーク認定に向けた取り組みでは、私たちの足元に広がる大地の成り立ちを学び、なぜ萩にこのような美しい景色や貴重な自然が広がっているのか、そしてそこに人が住み、どのようにして歴史や文化が培われてきたのかを、市民の皆さんと一緒に明らかにします。

これまで歴史や伝統的建造物など文化的な遺産に目が向けられ、自然に関しては「美しい自然」と表現されるに留まっていた萩市は、実は自然遺産の宝庫でもあるのです。たとえば、白と黒の縞模様の断崖や入り組んだ海岸線の美しい「須佐湾」をはじめ、活火山・阿武火山群の一つ、「笠山」山頂から望む日本海には小さな島がいくつも浮かんでいます。切り立った断崖の深谷美を楽しむ「長門峡」…すでにある萩の観光地を「ジオ」の切り口で見直すだけで、新たな萩の魅力を発見することができます。

また、2013年7月28日、萩市東部を襲った集中豪雨による土砂災害、堤防決壊による浸水被害は、私たちに自然の脅威と自然と共に生きることの大切さを教えてくれました。萩ジオパーク構想は、自然と人間生活との関わりを理解するとともに、防災や減災についての意識を高める役割を果たします。

さらに萩ならではの取り組みとして、古文書や絵画資料、石造物を通じて、歴史的な視点からジオパークについて語ることができます。

萩ジオパーク構想は、市民自らが、地質遺産を学び、楽しみ、次代に伝えていく「しくみ」をつくり、日本ジオパーク認定を目指します。



火山の研究に役立った絵巻物

毛利博物館所蔵の絵巻物「萩両大川辺・奈古屋島辺之図」(1855年頃)には、阿武火山群に属する火山である笠山、鶴江台、中ノ台、狐島が描かれています。写真上が絵巻物の狐島であり、下が現在の写真です。絵巻物の中央には丘が描かれていますが、下の写真にはありません。現地調査の結果、絵巻物に描かれている丘は、スコリア丘であり、整地のため削られてしまったことがわかりました。この結果、狐島は、従来考えられていたマグマが噴水のように噴き上がる溶岩噴泉、それに引き続く溶岩流の活動で終わったのではなく、最後にストロンボリ式噴火によってスコリア丘が形成されたことが明らかになりました。



しぶき ジオな地名 紫福

畑川山(紫雲山)の裾野が、京仏・奥畑・平原に広がっています。この三か所の土はいずれも紫色で、作物がよくできます。たとえ肥料をやらなくても、他の村より作物の出来がいいです。このことから、この地域を昔から「紫福」と呼んでいます(『防長風土注進案』1845年)。

紫雲山の火山噴火によるスコリアや玄武岩が風化した「紫色」の肥沃な土壌が、豊かな農作物の産出＝「福」をもたらしたのです。



平原台(玄武岩溶岩台地)と紫雲山(スコリア丘)

火山と人々の暮らし—神社や寺院の石造物だけでなく身近な暮らしに使われた鍋山石



松陰神社境内の灯籠



仏光寺の玉垣(1917年)



西見山八幡宮の牛(1902年)



石切り場がある鍋山

火山のめぐみ

美しい景色、人が住める平らな台地、田んぼや畑をつくった堰止湖、石材、おいしい水(火山は水を貯めてろ過する天然のダム)、農作物(玄武岩や安山岩の溶岩台地でいろいろな作物を栽培)、畜産、漁業(火山の周辺の海はすぐれた漁場。萩六島のまわりや海の中の火山、見島の海面下の広大な溶岩台地)など、萩はたくさんの火山のめぐみを受けています。



よこまぐろ



小川桃



山口あぶトマト



千石台だいこん



瀬つきあじ